

作文の部

朝日新聞北海道支社編集総務兼報道部長

中島 清成

応募された作品の一字一句に、自然を愛するひたむきな気持ちがあふれていて、深く感動しました。ご指導いただいた諸先生、各家庭のみなさまにも、改めて敬意を表します。

小学生の部入選の大友さんは、つくば万博見学の体験を通し、科学の発達と自然破壊という対比をうまく表現し、お母さんの言う「はんびれい」への悩みを、素直につづっていました。まさに「小さな目」が、私たちの直面する大きな課題と責任を鋭くついた、といえましょう。

佳作入賞した菊地さんは、おこずかいで花の種を買い、近所に配る「小さな運動」が光りました。富良野の千葉君は、視野を札幌・豊平川のサケ放流運動にまで広げ、「自然を守るのはぼくたち自身」と呼びかけました。千葉県から札幌へ引越し、車粉公害に驚いた中村さんは「ガスマスクのファッションショー」が始まらないかと、人や草花への害をユーモラスに批判しました。

いずれも自然保護への芽がしっかりと根付いており、表現力も豊かでした。

中学生の部入選の木村さんは、きれいな空気を生み出す緑の大切さを、小兒ぜん息というみずからの体験から訴えました。樹木の乱伐ではだかになつたがけが、雨で土砂崩れを起こす恐ろしさを目撃、自然破壊のこ

わさを主張していた点も高く評価されました。

佳作入賞の佐藤千春さんと福司さんは、ともに国内ばかりか世界にまで目を向け、アフリカの飢餓問題などが、森林破壊によって生じた点を指摘しました。身近で具体的な提案をした佐藤公君。ともに文章も整っており、学習の成果が十分に表れていました。

このほか、入賞できなかった中には惜しい作品が数多くあり、それぞれ考えさせられる主張や感想が盛られていました。また、今回の応募がきっかけで、「自然の大切さが初めてわかった」と、たくさんの人が書いていたことが、とくにうれしく感じました。

「こうしたみなさんがいる限り、日本の将来は明るい」というのが、審査員の一致した感想でした。今後とも、自然への愛を大きく育てることを心から期待いたします。

